

美術館ニュースの今後

『現代の眼』六〇〇号発行を機に

松本透

昨年は当館開館六〇周年の年であったが、東京国立近代美術館ニュース『現代の眼』の方は、本号をもって通巻六〇〇号を迎えることになった。

『現代の眼』は、これまでに一度だけ編集・発行方式のかなり大きな変更を行っている。一九九六年四月(第四九七号)から、モノクロ八ページの紙面を十六(カラー八/モノクロ八)ページに、月刊を隔月刊に切り替え、新聞紙面並みに活字を詰め込んだ創刊以来のレイアウト(二行十四五六段組)をあらためて、ひとまわり大きな活字を四段で組むようになった。隔月刊にした理由のひとつは、編集労力の軽減もさることながら、刊行時期等を年間五―六回開催される展覧会のサイクルに合わせるためであったと記憶する。あわせて情報量よりも視覚性を重視する方向に少しシフトしたのである。

『現代の眼』の記事は、展覧会関連のエッセイや論考、収集活動・シンポジウム・美術館教育などの報告や記録、所蔵作品研究や小論文、各種イベントの情報告知など、ざっと数え挙げてもひじょうに多岐にわたっている。とりわけ一九八〇年代に入ってから本格的な美術館時代・展覧会時代が到来し、カタログが格段に充実しはじめ、それぞれに特色のある、どちらかというとなら展覧会案内に重心を置いたニューズレターが次々に発刊されるなかで、『現代の眼』の針路についても、かなり突っ込んだ話し合いが幾度かなされたことが思い出される。いっそのこと研究成果の発表はカタログや『研究紀要』(一九八七年創刊)に任せて、『現代の眼』は展覧会紹介などのイベント情報に特化したらどうか、といった可能性まで話題にのぼったほどであるが、結果的にこの方向は採らずに今日にいたっている。展覧会カタログや研究紀要などとうまく棲み分けながら、単なる情報誌・広報誌に尽きることのない独自の内容を盛り込むことに、創刊以来の編集担当者のもっとも大きな苦勞があったであろう。

さて、『現代の眼』は六〇〇号を機に、印刷物としての発行と併せて、当館ホームページ上でPDF版のかたちで無料公開されることになった(ただし著作権の関係で掲載できない図版が生じる可能性がある)。印刷媒体と電子媒体の併用という点、いずれ近い将来、電子版に全面移行することを視野に入れた過渡的措置のように受け取られかねないが、今のところそこまでは考えていない。電子媒体による配信は世の趨勢だとしても、印刷物のかたちで残らない出版物の存在価値が将来どうなるか、今のところ誰にも占えないのではないだろうか。今後とも、『現代の眼』はミュージアムショップ等でお買い求めいただけるし、美術館・図書館等への送付もこれまでどおり続けられる。それに加えて、最新号やバックナンバーが、一部PDF版での公開をはじめた『研究紀要』、『年報』などと同じように、今後はホームページ上で随時ご覧いただけるようになる——と、お考えいただくのがよいであろう。

紙面デザインの刷新も——ご覧のように——さることながら、内容面の新しい試みについて、ここでは、ひとつだけ挙げておく。

これまで『現代の眼』の各号は、発行時に開催される展覧会の特集記事を中心に編集されてきたから、その執筆者には、展覧会を観る前に原稿をご用意いただくかたちになった。せっかく館外の専門家に原稿をお願いするのであれば、本当は展覧会をご覧いただいた上で、第三者的な所見なり感想をも聞きたいところであるが、ニューズレターのもつ展覧会の援護射撃的なはたらきを重視すると、どうしても現行のようなかたちになるのである。だが、最近のアンケート結果をみると、年齢層によっては展覧会の認知経路の第一位にインターネットが挙がるケースも増えており、もはや展覧会の盛り立て役ばかりが『現代の眼』の役割ではないであろう。美術館のニューズレターは、展覧会の反響なり批評をフォローする場にもなりうるのではないだろうか。——そんなことを考えて、今後は展覧会のおとを追った論評等をも機会に応じて掲載することになった。いづれにせよ、美術館機関紙のもつさまざまな機能を印刷媒体と電子媒体にどのように振り分け、どのように協働させていくか、まだまだ当分のあいだ試行錯誤はつづくであろう。

(東京国立近代美術館副館長)